

聖書：マルコの福音書 6：1～6

説教題：郷里の人々の不信仰

日時：2025 年 9 月 14 日（朝拝）

イエス様は今日の箇所でご自分の郷里に行って宣教されます。イエス様の郷里とはナザレのことです。この福音書の 1 章 9 節に、イエス様がバプテスマのヨハネから洗礼を受けた時、「イエスはガリラヤのナザレからやって来て」とありました。つまりイエス様は公生涯を始めるまでナザレで生活していたことが分かります。また 1 章 24 節にもイエス様を見た悪霊が「ナザレの人イエスよ」と叫んだことが記されていました。そのイエス様が郷里に帰って来て安息日に会堂で教え始められました。いわば礼拝で説教をされたということです。それはどんなに素晴らしい機会だったことか、どれほど素晴らしい伝道集会となったことかと私たちは想像するところです。

ところが実際はそのような期待とは全く反対でした。それが今日の箇所に記されている内容です。人々はイエス様が語る言葉を聞いて驚きました。「この人は、こういうことをどこから得たのだろう。この人に与えられた知恵や、その手で行われるこのような力あるわざは、いったい何なのだろう」と彼らは言いました。他の箇所にはイエス様が「律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられた」と記されています。普通の人間は他の権威に頼って話をするのに対して、イエス様の教えにはご自身の内にある権威がみなぎっていました。それは一聴しただけで分かる圧倒的な違いでした。また「その手で行われるこのような力あるわざ」とあります。そこには印が付いていて欄外に、あるいは「奇跡」とあります。人々はそのようなわざにも接し、驚きました。にもかかわらず人々はイエス様を受け入れませんでした。その理由が 3 節に述べられています。3 節：『この人は大工ではないか。マリアの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄ではないか。その妹たちも、ここで私たちと一緒にいるではないか。』こうして彼らはイエスにつまずいた。」 まずここにイエス様がかつて大工だったとあります。マタイの福音書の平行記事では「大工の息子」と言われていますから、父ヨセフも大工だったことが分かります。イエス様もその父の仕事を継ぎ、大工として働いておられたのでしょう。当時ギリシャ人は肉体労働を卑しいものと見なす傾向がありましたが、ユダヤ人は手を使う仕事を高貴な職業と考えました。ですからこの「この人は大工ではないか」という言葉に軽蔑の意味合いはありません。これは「この人は我々と同じ普通の仕事をしていた人ではないか」という意味です。我々

と同じく自分の手で生計を立てていたありふれた仲間の一人ではないかということです。また「マリアの子で」とあります。通常父親の名前を使って紹介される自然でしたので、これはヨセフが早くに亡くなったことを暗示するかもしれません。イエス様は「あのマリアの子」として人々に見られていました。またヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンと4人の名があげられています。いずれもイエス様の兄弟たちです。イエス様が処女降誕でマリアから生まれた後、通常の仕方でも生まれた子たちで、彼らはイエス様の弟に当たります。ちなみにこの中のヤコブは後にエルサレム教会の牧師となり、使徒の働きに記されているエルサレム会議で中心的な役割を果たします。またユダは新約聖書の終わりの方にある「ユダの手紙」を書いた人と考えられます。しかしこの時点ではまだ彼らはイエス様を信じていませんでした。すでに見た3章21節、また31～35節ではイエス様を連れ戻そうとしたことが記されていました。彼らは「外に立っていた」とされ、イエス様に従う「内側のグループ」には属していませんでした。ヨハネの福音書7章5節にも、イエスの「兄弟たちもイエスを信じていなかったのがある」とはっきり記されています。さらに名前は記されていませんが妹たちもいたことが分かります。複数形で書かれていますから、少なくとも二人以上いたことになります。彼らはみなこの小さな町、ナザレの町の人々に知られていました。このことのために人々はイエス様につまずいたと言われています。イエス様が語る言葉を聞いても、その力あるわざを目の当たりにしても、イエス様を信じようとせず、むしろ拒絶したのです。

もしイエス様が特別な家柄出身で、さらにエルサレムで立派な教育を受けていたとしたら、話は別だったでしょう。人々はイエス様をナザレの誇りとして、「おらが町のスター」として受け入れたことでしょう。しかしイエス様の出自はそうではありません。あの家は大工の家であり、家族も良く知っている。言ってみれば平凡な家庭で特別なところはない。そんな家から出た一人が突然立派に語り始めても、人々にはとても受け入れることはできなかったのです。そこには嫉妬のような思いもあったでしょう。「こんな家の出身の彼にへりくだって耳を傾けたくはない。彼を信じるなんてなおさらだ」といった思いが心の底にあったのかもしれません。これは後に見るように、裏を返せばイエス様がいかにご自分を低くし、私たちの中の一人となり、何十年もともに生きてくださったか——その謙遜を雄弁に物語るものです。けれども人々はその「低さ」につまずいたのです。イエス様が昔からこの地域でもっと目立ち、派手で、栄光に満ち、人々を圧倒するような存在だったらどうでしょう。ナザレの人々は「あ

のイエスが戻って来た！」と誇りをもって迎えたことでしょう。しかし現実には、あれは大工の家の息子の一人。マリアの子で、弟たちも妹たちも良く知っている。我々と同じ、何も特別ではない家の出である。そんな人が何かを語ったところで耳を傾ける気になれない。大した者がここから出るはずがない。——そのように考えて彼らはイエス様を拒絶したのです。

イエス様はこれを見て、言われました。「預言者が敬われないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」これは当時、ユダヤ社会や、異邦人の世界にもあったことわざのようです。関係が近すぎると、かえって相手を敬うことができなくなるという人間の弱さを表しています。自分と同じ境遇にあった人、同じ生活をして来た人に対しては、その人を自分より上と認めたくないという心が働くのです。先に触れたように、特別の名家出身とか、生まれつき身分が違うなら、その人を敬おうとする心も持ちますが、自分と同じような生活をして来た人が何かを言ったり行ったりしても、「あの人だけが特別なはずはない」と思い、むしろ憤りさえ覚えてしまう。そうして退けてしまうのです。

この不信仰の結果が 5 節以降に記されています。「それで、何人かの病人に手を置いて癒やされたほかは、そこでは、何も力あるわざを行うことができなかった。」これは「イエス様にもできないことがある」と言っているのではありません。そうではなく、人々の不信仰のためにナザレでは神の力あるわざが行われなかったということです。イエス様は神の国を宣べ伝えておられました。1 章 15 節で言われた通り、神の国にあずかるには「悔い改めて、福音を信じること」が求められます。その悔い改めや信仰がないところには神の国の祝福は現されないのです。ですからここで語られているのはナザレの町が不信仰によって失ったものの大きさです。もし信仰によって応答していたなら多くの祝福が与えられたことでしょう。しかしそれはほんのわずかの例外を除いて現わされませんでした。何人かの病人が癒やされたのは、その程度のごくわずかな応答はあったということなのかもしれません。けれども町のほとんどの人々はイエス様を拒絶しました。ですから神の国の祝福は現されなかったのです。そしてその不信仰を見てイエス様ご自身が驚かれたと記されています。それでイエス様はその地を去り、他の村々を巡って宣教を続けられました。そしてこの後、イエス様が再びナザレに戻られたという記事は聖書に出て来ないのです。

以上の箇所は私たちにどんなメッセージを語っているのでしょうか。まず最もはっきりと示されているのは、——イエス様が拒絶されたという事実です。実はマルコの福音書は、これまでもこのテーマを描いて来ました。初めに律法学者やパリサイ人たちがイエス様に対して質問をし、反発し、敵対し始めた場面が繰り返して出て来ました。そのまとめとも言えるのが 3 章 6 節です。「パリサイ人たちは出て行ってすぐに、ヘロデ党の者たちと一緒に、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた。」 その後も律法学者たちはイエス様を「悪霊のかしらによって悪霊を追い出している」と非難しました。イエス様の家族さえ「イエスはおかしくなった」と言われているのを聞いて連れ戻そうとしました。またゲラサ人の町では人々が「どうかこの地方から出て行ってください」とイエス様に懇願しました。確かに今日の箇所の直近ではイエス様が様々な力の上に権威を持つ方であることが示されました。大自然の上に、悪霊の上に、病の上に、そして死の上に権威を持つ力ある方であると。そういう箇所を読んで来た私たちは思うかもしれません。「イエス様はこのまま勝利と成功を収め、人々に歓迎され、喜ばれるのではないか。」 しかし今日の箇所は、その考えにストップをかけるようにはっきり語るのです。「そうではない！」と。イエス様はご自分の郷里に行かれたにもかかわらず、拒絶されました。これはヨハネの福音書 1 章 11 節の言葉と重なります。「この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。」 今日の箇所は、先に触れた 3 章 6 節に続く形で、イエス様が人々から拒絶された姿をさらに描いています。そしてこれは、この後に起こる究極的な拒絶すなわち十字架を指し示すものです。イエス様の生涯はそこに向かっていくということを、この箇所は私たちに思い起こさせるのです。イエス様の生涯は神の国の力を表し、ある人々には救いと喜びをもたらしましたが、その全体に通底するのは「拒絶」という調べです。ですからこの箇所を「つまらない箇所」「暗い出来事」として読み飛ばしてはいけません。イエス様はどのような道を歩まれたのか——その本質を深く伝えるためにマルコはこの箇所を書いたのです。

とは言え、これは私たちがただ「残念だ」と思うべき箇所ではありません。確かに表面的にはパッとしない、暗い記事に見えるかもしれませんが。しかし神の視点から見ると、このイエス様の拒絶を通してまさに救いの計画が進んでいます。この拒絶の頂点にあるのが十字架の死です。イエス様は人々に捨てられ、殺され、十字架の上で命を犠牲にされました。しかしそのことによってこそ私たちの救いは確立されます。ですからこの箇所を通して、神のご計画——救いのプログラムは確実に前進してい

るのです。イエス様が拒絶されたこの出来事を通して神は働いておられたのであり、ここにも私たちの救いを成し遂げるための神の力強い御手はあったのです。

ではこの光の下で私たちはどのように応答すべきでしょうか。最後に短く3つのことを述べて締め括りたいと思います。第一に私たちは今日の箇所を通してイエス様のへりくだりの深さを覚え、心からの感謝をささげたいと思います。イエス様は望まれるなら立派な家に、豪華な宮殿に、影響力のある人々の家に生まれることができたはずです。そうすれば人々の注目や尊敬、称賛を集めることができたでしょう。しかしイエス様はそうされませんでした。人々に賞賛されるためではなく、仕えるために来られたからです。そのため、ガリラヤの地に、低い身分の中で生まれ、30年もの間、普通の人々のただ中で生きてくださいました。またこの時、ナザレで福音を語りましたが、人々はイエス様を退けました。その不信仰はイエス様にとって驚くべきものだったと記されています。このような卑しい扱い、失礼な扱いをイエス様は耐えてくださいました。ヘブル人への手紙12章3節にこうあります。「あなたがたは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えなさい。」今日の箇所のナザレの人々の応答も、まさにその一つであったでしょう。私たちの救いのためにここまでへりくだり、このような扱いをも甘んじて耐え忍んでくださった御子の前に、心からの感謝をもってひれ伏したいと思います。

第二に、主に従う私たちの歩みにも拒絶はつきものであるということです。私たちの主ご自身がこのような扱いを受けたのですから、その主に従う私たちも同じ扱いを受けることは当然予期されることではないでしょうか。次回は12弟子が宣教に派遣される記事を読みますが、その11節にも、彼らが拒絶されることがあると語られます。またその後、バプテスマのヨハネがまさに拒絶され、殉教する記事が続きます。ですから私たちも世から拒まれるようなことがあっても驚いてはなりません。この世は主を拒絶した世界です。ですから私たちも主に従うなら、同じような扱いを世から受けることを予期しなければなりません。それをデフォルト（当然の前提）と考えて主に従って行くようではなければなりません。この理解が私たちの信仰の歩みをむしろ支えるものとなります。

そして第三に、その道の先にこそ真の栄光があるということです。イエス様は拒絶の道を歩まれましたが、それで終わりではありませんでした。その道を通して栄光へ

と入られました。そしてその歩みのすべてに神の御手が働いていました。私たちも主の足跡に従って世から拒絶されることを経験するとしても、それで終わりではありません。それは真の栄光へとつながる歩みです。イエス・キリストに結ばれている者として神の国の祝福と力に豊かに生かされる道です。ナザレの人々はイエス様を信じず、イエス様を捨てたがゆえに、神の国の祝福にあずかることはできませんでした。私たちは私たちのためにへりくだってくださった主のお姿を深く覚え、感謝しながら、この主に従う歩みを強められて行きたいと願います。そしてこの主に従う道にこそ備えられている神の国の祝福と力に豊かに生かされる者たちとされて行きたいと願います。